除夜の鐘と共に年が明ける。東雲を茜色に染め現れる日の出を待つ。
初御空…。元旦の空をそう呼ぶ。初という文字には新しい年を迎えるよろこびがある。
さまざまな情景が新年の淑気につつまれ、生まれたての表情をみせる。

ふるさとの風
～新年を寿ぐ～
睦月

和敬清寂

神都の侘び ― 茶人 杉木普斎 ―

初釜は、新春を寿ぎ清々しい空気の中で行われる茶のつどいである。
茶の道を修める者にとっては、一年の帷を開く大切な行事にはりつめた空気がみなぎる。簡素でありながら贅沢。豊かな心と心の交わりを目指した「侘び茶」。茶の湯の神髄は千利休の「侘び茶」にあるという。

花は野の花のように
炭は湯の沸くように
夏は涼しく
冬を暖かに
刻限は早めに
降らずとも雨の用意
相客に心をつけよ

利休七則

神宮の鎮座する伊勢は古くから門前町として栄え、全国から多くの人々が訪れた。
文化人との交流も盛んで、社交場であり教養の場でもある茶の湯は神官を中心におのずと浸透していった。
江戸時代前期千利休の侘びの茶風を志した茶人がいた。
杉木普斎。「神都に数寄者あり」と謳われたほどの茶道界では有名な人物であった。

杉木普斎は寛永五年（1628）伊勢山田一志久保町（現一志町）の御師杉木吉大夫家に生まれた。
名は光敬、通称吉大夫、字は周禅、号は普斎のほかに直入庵、有麦庵、端夢子、徳失庵などがある。
法名は宗喜と称した。十五才で茶湯修行を志し京都に出て千宗旦に入門した。

御師であったため各地を遍歴する事も多く、播州網干（姫路市）の廻船問屋灘屋佐々木一族をはじめ、地方有力者との師檀関係を活用しながら利休正風の茶の湯を広めていった。
特に門弟に茶の湯を伝授するために書かれた六十巻以上ある「普斎伝書」は有名で、貞享四年（1687）に息子吉太郎に与えた伝書は十巻程度に体裁が整えられ「普斎十ヶ条」と呼ばれている。
茶道の他に書画、俳諧をも好み出口延常、榎倉武因など多くの知識人との交流も深く、彼自身も文化人の一人であった。また茶の湯の教えを尊び、清貧に甘んじ常に質素な生活を好んだという。

普斎は茶の湯の神髄をこのように述べている。
茶の湯は、客といふものなし。却って客は茶のわづらひと、古人も申され候、さればとて、ひとりたのしめとにはあらず。分限者のあさましき心には、道具いづれも、めづらしきものばかり、いだし申候。よからん人のせぬ事なり。一、二種かはりたるは、数寄一人たる心なるべし。以下略
茶道の奥義を極め、宗旦四天王の第一人者として茶の湯を広めた流派を世は普斎流と呼んだが、自らは名声を避けて「利休流」とのみ称していた。

利休の正風を伝えることを使命とした行脚の茶人杉木普斎。宝永三年（1706）七十九才にて永眠した。
現在伊勢市厚生小学校西側道路沿いに「茶人杉木普斎邸跡」と記した碑がひっそりと建っている。
和敬清寂・・・。
利休の茶道精神を要約した言葉で利休七則と合わせ四規七則と称される。和・敬は茶事における主客相互の心得、清寂は茶庭、茶室、茶器に関する心得とされている。また、この四文字から茶道の世界を越えて日本人の生き方を感じる事ができる。和を以って他を敬い清らかな心で生きることの大切さ。
そして寂は「涅槃寂静」の境地、すべての無駄を省いて最後に残った生粋の心をいう。
和敬清寂―。歴史を越えて人生の知恵と人間の真心を感得させてくれる言葉である。

図書館だより
2013年1月号より

今年平成二十五年は御遷宮の年。
伊勢に来られた多くの人々へ、
一期一会のおもてなしを…。

◇正続　神都百物語（松本時彦／著　古川書店　L243／マ）
◇伊勢市史 第七巻 文化財編（伊勢市／編　伊勢市　L243／イ／7）
◇瑞垣113号（神宮司庁）　◇伊勢茶道史（佐藤虎雄／著　L791／